

第56期（2007年4月期）日本語研修コース

鹿 島 央

今年度4月期の大使館推薦の研究留学生は、国際開発研究科をはじめとする文系部局12名、理系部局7名で、日本語学習歴にも幅があった。全般的に大変熱心な学習者が多く、集中して日本語学習に打ち込めた感をもった。

1. 研修生

A. 大使館推薦（研究留学生）

文部科学省より配置された大使館推薦の国費研究留学生は、13ヶ国19名（カンボジア5名、インドネシア2名、ベトナム2名、ミャンマー、ブラジル、メキシコ、アゼルバイジャン、タジキスタン、ギリシャ、ポーランド、ガーナ、ケニア、ギニア各1名）で、進学先は名古屋大学18名、名城大学1名であった。今回、19名のうち6名は全学向けの日本語講座を受講した。内訳は、IJ211（全学集中日本語中級前半）1名、IJ212（全学集中日本語中級後半）4名、SJ101（全学標準日本語初級）1名であった。初級の学生は、研究の都合上、全学での受講となった。

B. 学内公募（大学推薦国費留学生）

今回は応募はなかった。

以上のように、第56期は研究留学生19名、うち13名が日本語研修コース、残り6名は全学向け日本語講座を受講した。

2. クラス編成

授業は、2クラス編成とし、専任教員2名、非常勤講師10名の計12名が担当した。今期の13名の中には、全くの初級ではなく多少の学習を行っているもの4名がいたが、初級レベルの学生と同じカリキュラムで授業を行うことに問題はなかった。

3. 時間割と日程

授業はこれまでのように月曜日から金曜日まで、午前8時45分から午後2時30分まで90分授業を3コマ行った。

コースの日程は以下の通りである。

4月10日(火) 開講式、4月11日(水) 授業開始、夏季休業7月21日～8月30日、8月31日(金) 授業再開、9月11日(火) 修了式。夏季休業中の全学向け夏季集中日本語講座は、今年度より廃止となった。見学旅行は、9月10日にバスで彦根城と琵琶湖を訪ねた。

4. カリキュラム

カリキュラムは、これまでと同様に(1)主教材 *A Course in Modern Japanese [Revised Edition], Vols. 1&2* (名古屋大学日本語教育研究グループ編) を中心とする授業、(2)その他の活動(ホームビジット、自分について話す、書く活動など)(3)専門について話す、の3つで構成した。以下に、概要について報告する。

(a) 教科書を中心とする授業（1～14週）

夏休み前に主教材である *A Course in Modern Japanese, Vols. 1&2* が終了するようなカリキュラムとし、最終テスト、テストチェックを行った。これまでと異なる点は、9月に行う専門発表のオリエンテーションを夏休み前に行い、学生には自身の発表について事前に考えておいてもらうようにしたことである。

- ・ドリル（各課の文法練習）

- ・ Dialogue（会話）

各課のはじめに発音練習を行った。

- ・ Discourse Practice & Activity

会話の運用練習として各課の Discourse Practice にもとづいてロールプレイなど口頭練習を行った。

- ・ Aural Comprehension

- ・ Reading Comprehension

(b) その他の活動

- ・ 話す練習

まとまりのある話をする練習として、先期と同じテーマ(「たのしかったこと」「趣味について」「国の観光地」「国との違いについて」)について原稿を書いてから話す活動として口頭発表を行った。日本人ゲストにインタビューする活動は例年通り2度行った。

・書く練習

話す練習での原稿作成を書く練習としてワープロを用いて行なった。

・Pronunciation Practice

日本語の発音システムを6回(45分×6回)にわたり導入・練習する「SoundSystem」というクラスと、会話の時間に「Sound Practice」という発音練習用シートを使用し、発音練習を行った。

・ホームビジットプログラム

ホームビジットプログラムも例年のように第13週目の土、日に実施した。

教科書の80%程度が終了し、国の観光地に関する発表等も経験したあとでもあり、実際に日本語がどの程度使えるのかを実地に体験できる機会になっている。学生にはおおむね好評な活動である。訪問した翌週には各クラスで体験したことをレポートし、その後訪問家庭へのお礼状を学生自身が書くことも行っている。

(c) 「専門について話す」(第15週)

個別指導を行った後、各留学生の専門領域について発表した。発表は207講義室で行った。ほとんどがパワーポイントを使用しての発表であった。

5. アンケート結果

今期から修了アンケートの結果について報告する。結果は以下の2点である。

①プログラム満足度

②留学生自身による達成度とコース満足度

①プログラム満足度

「このコースのプログラムの内容に満足していますか」という質問に対して、「0 (not satisfied), 1, 2, 3 (satisfied)」の4段階で回答するものである。

表1の上段は、「3 (satisfied)」と回答した人数、下段は「2」の回答までを含めた回答人数を比率で示したものである。参考のため、52期(2005年4月期)、54期(2006年4月期)についても示してある。

表1 56期の満足度 (%)

期	52	54	56
「3」の回答	68	76	100
「3」と「2」の回答	100	100	

今期の学生の満足度は十分に高いことがわかる。

②留学生自身による達成度とコース満足度

学生自身は自分の成果についてどの程度満足しているかについて、すなわち自分の成果をどのように評価しているかを記す。質問は、「学習成果に満足していますか」というもので、回答はコースの満足度と同じく、「3」から「0」までの4段階評価である。

表2 56期の学生自身の満足度

期	52	54	56
「3」の回答	80	44	23
「3」と「2」の回答	80	88	77

「2」までの評価である「ほぼ満足」を含めると、自分自身でも成果についてかなり満足しているといえるが、「3」のみの回答では、成果について十分には納得していないことが伺われる。表1との結果から、プログラムには満足していても、自身の満足度は他の期と比べるとそれほどでもないという結果となっている。

6. まとめと問題点

今期の留学生は最初にも述べたように、大変熱心で真面目な学生であった。積極的に日本語を使用し、全体をひっぱっていくような学生がいたことも、他の学生の学習意欲を高めた要因であった。集中コースは短いようで、やはり長丁場であるので、全体的な雰囲気はとても重要な要因として学習に影響を及ぼす。中には、気候の違いから体調を崩した学生もいたが、全体的にはお互いの協力の下で、順調に学習が続けられたと思う。以前にも述べたことであるが、専門教育での日本語の使用は非常に限定的である部局でも、指導教員の先生方が積極的に日本語授業への参加を留学生によびかけていただいているおかげで、こちらの運営もスムーズに行うことができている。今後とも、一層のご協力をお願いするとともに、よりよいコースを目指して努力をしていきたいと考えている。